

新時代

第 13 号

昭和46年2月20日

日本盲人福祉研究会

(文 月 会)

スイスの誇る

ヘルメス

カナタイプライター

最も新しい	デザイン	ポータブルから
素敵な	タッチ	全電動まで
鮮明な	プリント	多種多様
静かな	音	呈機種別カタログ

東日総代理店 (株) 協和商会

本社 東京都千代田区神田鍛冶町2-16 TEL03(256)2611代表

営業部 東京都千代田区神田鍛冶町2-14 TEL03(256)2381代表

(光起ビル)

横浜営業所 横浜市神奈川区鶴屋町2-19 TEL045(311)7506・6253

世界の指先が爽快なリズムを知っている

オリベッティ・タイプライター

olivetti

日本オリベッティ株式会社

東京都目黒区碑文谷1-26-17 TEL 714-1211

資料請求先/ 本社広報室または日本点字図書館

巻頭言

偏見を捨て愛のまなざしで

「鳥居篤次郎先生の逝去に懷う」

勝川 武

いささかでも、盲人社会に文化の光をもたらし、盲人福祉の発展のために、集団で奉仕できればと請い願って、本会は昭和36年7月（文月）に大阪の北区太融寺で発足した。今年で早くも10周年を迎えたことになる。その間、本会をめぐってさまざまな出来事があった。しかし、中でも敬愛していた名誉会員の鳥居篤次郎先生をなくしたことが、最もショッキングな出来事であった。

昨年9月10日の夜、鳥居先生重態、翌朝、死去の電話が入り、深い悲しみの情がいっぱいこみあげてきた。また、先生に親しくお会いしてご指導を受けられる日もあるものと確信していたのに、残念だった。無言の対面であるけれども、せめて一度お目にかゝってお別れしたいと思い、葬儀に参列した。

葬儀はすべて禅宗の様式だった。式に先立ち、京都ライトハウス田村主事が葬儀上の説明をされた。青竹の囲みの中に棺と遺影が安置され、勲三等の勲章や教育功労賞の銀杯が燦然と輝き、厚生大臣、文部大臣、京都府知事、京都市長などから贈られた香り高い花が飾られ、すべて白と青と黒の色彩でおおわれていた。弔電文は、立命館元総長末川先生はじめ、397通と公表された。先生の棺の前で香をたむけ、しばしの黙禱を捧げ、非痛な想いでお別れをした。帰りのタクシーの中で、運転手さんが「どこへ行っていらっしゃるやいましたか、鳥居先生の葬儀ではありませんか。」と聞くので、「その通りです。よく知っていますね。」と聞き返すと「昨日の京都市内の新聞は、皆大きな見出しで取りあげており京都市の名誉市民で、市民葬が24日に行なわれることになっておりますよ。」と語りかけられた。今更ながら先生の偉大さに感銘をした。

先生はわれわれの会を心から愛してくださった。「生きた盲人の社会生活は、広く複雑で、単なる理論や教養だけではとらえつくせない。しかし、理論や教養を無視した盲人福祉の意見は力が弱い。君達の仲間は、三療家あり、盲学校の教師があり、盲施設の職員があり、牧師あり、その他正眼者の中で働く者などがあり、盲人

として、生々しい体験を持っている。そして、何らかの理論や教養を身につけている者が多い。だからそれぞれの立場から、考えを述べあうことは、お互いに本人の成長にとっても、日本の盲人福祉の増進に対しても意義深いことだと思う。しかし、理論や教養は、君達だけが持つものでないこと、盲人でなくても盲人福祉について立派な意見を持つ人があること、などを忘れてはならない。そして偏見や高慢に陥ることがあってはならないがね。」などと、こんこんとさとされたことがあった。また、先生は新時代(本誌)を活気的なよい冊子だと高く評価され、日本盲人福祉委員会から、新時代に対する助成金として10万円の支出を骨折っていただき、実現をみた。先生が病床に伏せられると、昨年からの助成金は打ち切られたが、先生の本誌に対する愛情の深かった事を今更らながら痛感するところである。

さらに例会についてみると、今回までに4回、関西で行なった事になる。第1回は、まだ会の形を成していなかったし、第4回目はすでに先生は病床にあった。先生が出られる機会は、第2回と第3回であったわけであるが、この2回ともご出席いただき、日程の大部分を共に過していただいたのであった。

また、先生は終始愛情のまなざしでにこにことしてわれわれを見守っていてくださったことは今もはっきりと思い出される。

また、ある時は、「日本に於ける盲学校の数は多いが、大学に進む盲人はいかにも少ない。もっともっと多くの盲人が大学へ進学すべきだ。」さらに、「国民の税金でまかなわれている国立大学の受験が、日本国民である盲人に対して、均等に与えられていない事も、なんとかしなければならぬ。」などと、申された事もあった。

先生が深く愛されていたのは、われわれの会だけではなく。皆さんもご承知のように、日盲連会長、京都盲学校の副校長、京都ライトハウス理事長などをやっておられたことがあるわけだが、盲人の団体活動、盲教育や盲人の福祉施設などに対して、偏見を持たれず、優れた意見と深い愛情をお持ちであった事を思い出すのである。「人間は愛するところに葬られる」という言葉がある。鳥居先生は盲界を深く愛しておられた。鳥居先生は日本の盲界に葬られた方である。

また、「人間にとって、愛する者の葬られた大地は神聖である。」という言葉もある。私は敬愛する鳥居先生のご逝去を通して深い悲しみと、日本の盲界が神聖であるとひしひしと感じているものである。しかし、この神聖な日本の盲界の現状は

どうであろうか。日盲連では、日盲福祉センターの着工をみるに至った。盲教育界では、養護訓練の新領域を持つ学習指導要領が実施されようとし、曲り角にさしかかっている。社会福祉施設に対する寄付金の無税に関する法案が国会に提出されようとするなど、いささか光がさしてきたとは言えるが、その前途は遠慮である。最も盲人に適する伝統を持つ三療の世界でさえ、療術師や正眼者の進出の問題がある。盲人にとって、最も困る交通問題をはじめ、重複障害者の問題、一般社会との断絶の問題、等々を考えると、前途は多難である。これはあたかも、旧約聖書にある、40日40夜、地に雨を降らせ、地球を150日おった大洪水の中にあったノアの箱船に、一羽の鳩がオリーブの若葉を運び、洪水が終り、希望と光をもたらした時のように思われる。われわれ、日本盲人福祉研究会は、いよいよ力を合わせ、「新時代」の内容の充実や、発行の回数を増やし、例会や文化講演会を意義深いものに高め、盲人の大学進学対策や、学生援助に努め、希望と光のオリーブの若葉をもたらす鳩の役目を、いささかでも果して、鳥居先生の御霊に答えなければならぬと思うものである。また、鳥居先生にあやかり、偏見を捨て、愛情のまなこを注ぐことに努めたいとの気持ちでいっぱいである。

最後に、鳥居先生の御霊の安らかであるように祈って筆を留めることにする。

(筆者は岡崎盲学校教諭 本会副会長)

点訳書利用者は何を求めているか

松本昌三

はじめに、点訳書を利用する人達が、どんなことを希望しているかを本格的に調査した例はまだないようである。今回文月会々員を中心として学生、教員、福祉施設関係者などから得た。いくつかの回答をもとに以下のような結果をまとめてみた。もとより調査というよりは予備調査的なものであり、一般の視力障害者とはやや異った特定の人々を対象としたものであるため結果も少し特種なものとなったかも知れない。この点お断わりするとともにいづれ本調査としてまとまったデータを集めたい希望であることを付記しておきたい。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。